

＜今日の説教のテモテへの手紙Ⅰ 4章8～10節＞

1 救いは「すべての人」と「信じる人」のどちらに与えられるのか？

先週説明し残した10節だけを取り上げることにしました。大事な1節だからです。「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです」。ここでパウロが力を入れて「労苦し、奮闘するのは」と言っているのは、もちろんイエス・キリストによる救い（福音）を人々に伝える取組のことです。しかしここで気になるのは、「すべての人」と「信じる人」のどちらが救われるのか紛らわしく思える「すべての人、特に信じる人の救い主である生ける神」という言い方です。しかし全く紛らわしくないのです。神様はすでに御子を十字架に架けて下さり、全ての人の罪を赦して下さったからです。確かに、「救いは信じる人に有るのであって、信じない人には無い」とも言えます。しかしそれは、すでに赦されているのにそのことを信じないから有るとは思えない「無い」です。ルターは、救われるのは自分にかかっている（自分が正しくならなければならない）と思っていました。そしてそれを成し遂げられない自分に絶望していました。しかし、そんな中で、救いは「自分の義」ではなく「神の義」によるものであることに気づかされ、その神様の恵みの大きさに打たれ、その恵みを伝えることこそが主の教会のすべきことと確信したのです。（ローマの信徒への手紙1章16～17節の「神の力、神の義」を語るパウロの力の入れ様に注目）。

4 この神様だから、この世も来るべき世もお委ねできる！（8）

先週、7,8節に出て来る「信心（敬虔とも訳せる）」と言う語に注目しましたが、これも以上のことが分かると、より正しく深い信心の姿が見えて来ます。信心（敬虔）とは、信じる対象（神様）を何があっても信じ抜く姿を示す言葉です。しかし、それを信じていい根拠をしっかりと確認せずに何でもいいから闇雲に信じると大変なことになります。ご自身の御子を私たちの罪を赦すために十字架に架けて下さるような破格の愛を示して下さった神様が他のどこにあるのでしょうか？！この神様がイエス様を通して私たちに呼びかけられているのです、「私のもとに来なさい。私の尽きることのない命の水を飲みなさい」と（ヨハネによる福音書4:14、3:16）。お応えしようではありませんか！